

# Browningの*Saul*の中にみられる

## Davidの偉大な独白

渡 邊 清 子

### Prelude

R. Browningの*Saul*は彼が世に問うた多くの詩の中でも特に永遠不滅の傑作として広く愛読されている調べ高い宗教劇詩である。 Browningの劇的独白 (dramatic monologue) は有名すぎる程有名で、多くの特色ある詩をこのstyleで書いている。しかしこの詩に関しては A. D. Porter は次のようにのべている。“This is not a dramatic monologue, but a soliloquy, as there is no listener present. David is in the field in the early morning alone with his sheep, reviewing the wonderful experiences of the night before. The entire poem is a narrative of those experiences, which he is telling over in detail to himself.”<sup>①</sup>つまり彼女がいうように、この詩の中には1人も彼の独語を聞く相手はいなく、彼はたゞ彼の経験した素晴らしい神秘的な物語を自分自身に自ら語って聞かせているだけである。それ故、これは厳密に言えば、劇的独白ではなくsoliloquyであると言った方がよいと思う。文学史上劇詩の中にsoliloquyを部分的に含むものは珍しくないが*Saul*のように詩全体がそれによってなっているのは殆どないと思う。しかも題が*Saul*となっているのに、19節 (stanzas) 335行からなる全篇が1人の人Davidの独語によって語られてい

① Alice Downey Porter; *Easy Lessons in Browning* (The Gorham Press, U. S. A., 1927) p. 129.

るのだから驚くばかりである。

F. G. Kenyon<sup>②</sup>によればSaulは1845年に*Bells and Pomegranates*のPart VIIの中に部分的に、当時まとまった分だけ、即ち現在の9節までのみが掲載された。それはBrowningが当時それを、彼が満足するように完全にまとめ終え得なかったからだということである。1849年に出版された*Poems*の中にはこの時と同じ形のまゝであらわれていたが1855年には*Men and Women*の中に現在みられる形で印刷されて出ている。Kenyonは1～9節までは普通の“a series of beautiful word-pictures;”の域を脱していないが、それからの後半部は“…the greater and grander parts, which have given the poem its position as one of the best known and most thrilling of Browning’s poems, belong, like so much of his best work, to the Italian period.”<sup>③</sup>と称賛を惜しまない。詩人がイタリアに滞在中に出版した多数の優秀な詩と共にSaulは“Dramatic Lyrics”の中の1つとして分類され、現在ますます高く評価されている。Browning自身もかつて1855年3月にMr. E. Gosseから中位の長さのものでBrowningの代表作品と思われるものを4つ挙げてほしいと頼まれた時、Saulをその1つに加えたKenyonはしるしている。そのようにやはり彼の自信のもてた作品だったと言ってよいと思う。

齋藤勇氏がいつか「サウル」について研究をされた時「ブラウニングの詩がいかに難解なるかはここに説くまでもない」と記されておられた。まさにそのとおりで、この長篇の詩をBrowningの意とするままに正しく、間違いなく訳すことは殆ど不可能に近いように思われる。しかし講解という形でならば可能かもしれないと考えてみたが、各節毎の細い講解は次回にゆずり、その代りに今回はこの詩の内容の歴史的、宗教的背景を聖書をたよりに明らかにし、ダビ

②本論文に引用するSaulの中の詩行はすべて下記の書による。

Sir F. G. Kenyon (with introduction by); *The Works of Robert Browning; Centenary Edition in Ten Volumes*, (Ams Press, Inc., New York, 1966) Vol. 3, pp. 179-199

③Sir F. G. Kenyon: *ibid.*, pp. xxi-xxii.

デのうたの理解を深めておきたいと思うのである。

Saul王は神の前に大罪を犯したが故に神の怒りに触れ、王位を剥奪され、悪鬼にとりにつかれて苦しみ、懊悩し、絶望した、とあるが、筆者は王の犯した罪が何であるかを明らかにしない限り、Browning がダビデに語らせたことが無意味になるように思われる。それでサウルの犯した罪は何であったか、その本質を探ってみることにする。そしてその罪の深さを悟ってこそ、ダビデが最後に述べる“See the Christ stand”の真の意味が理解されると確信するのである。

Browningは神学者でもなければ哲学者でもない。ましてや科学者でもない。それで例え題材を聖書から得たとしても、その取り扱い方は、彼独特な詩人としての想像力や考え方を加味して、詩を作成している。併しそれは、仕方のないことであり、当然許されるべきことでもあろう。従ってこの詩が必ずしもいつも聖書の信条にそくしたものでなければ価値が少い、等と言われるべきではない。むしろ聖書に精通し、その語る所を敬重した彼が、細かく文字通りにあれこれとこだわらず、自由奔放に生命力溢れる表現で彼の時代の人々にのみでなく、現在の多くの人々に、希望と感銘を与えることが出来るとすれば、大いに賞賛すべきことではあるまいか。Saulの梗概に入る前に以下の3つの事項に就いて述べておきたい。

(1) 初めにSaulの中心に立つ問題の人物サウルとはいかなる人物であったかみてみよう。サウルはKishの息子でIsraelの最初の王として、さだかではないが、凡そ西暦紀元前1020から1004までの間に在位した王であると言われる。彼に関する記録は主に旧約聖書のサムエル記による。Samuel記は旧資料と新資料の合成されたものだとされている。サウルに関するものは多くこの旧資料により、王国を好意的にみている。それに反し新資料は王国の成立を神権政治に敵対するもの、とする傾向があるとされている。ともあれ聖書によればSaulの家はギベヤ (Gibeah) にあってベニヤミン族 (Benjamin) に属していた。

彼の家は名家でろばや召使い牛や畑をもった富裕な農家であつたらしい。彼が聖書の中で初めて注目されるようになったのは、その部族の王として選ばれた時である。彼がいかにして王位についたか、についてはいくついかの伝承が残されている。その1つとして彼は父の命に従って若者を1人つれて、いなくなった雌ろばを探しに行った時、主なる神によって遣わされたサムエル (Samuel) に出会い、油をそゝがれ、君主とせられたと旧資料は伝えている。(Iサム9:1-10:16) ④第2はくじによって選ばれたという説 (Iサム10:17-27) ⑤がある。第3に旧資料によればSaulがまだ単なる農夫としてギベヤにいた時、アンモン人 (Ammonite) の来襲があつた。その時彼はこの大敵を迎え打って圧倒的な勝利を得た。そこで予言者サムエルはギルガル (Gilgal) に民をつれてもどり、そこで王権を創設する宣言をした。そして民等と共に主なる神の前にSaulを全イスラエルの王と認めて大いに喜んだというのである。(Iサム11:15)

しかしサウルの主なる使命は長年この地に勢力を張っていて敵対関係にあつたペリシテ人達 (Philistines) のもとから、イスラエルを開放することであつた。(Iサム13:3-5) そのことを成就させるためにもイスラエル全土の民には強い王が是非必要であつた。サウルは、若い頃から優れた武人であつた彼の長子ヨナタン (Jonathan) に常に助けられたことは言うまでもない。かくしてサウル王の一生はペリシテ人との激しい戦の連続であつた。それで当然のことながら行政的な面には力が及ばなかつたらしく、彼は12の部族からなるイスラエルに中央政府を組織することもなかつた。ただ最小限の首都らしきものを建設したにすぎなかつたし、彼の家のあつたギベヤは簡素な城塞のまゝであつたと言われる。しかし彼は外敵ペリシテ人を退ける大事業を成し遂げただけでなく、ペリシテ人と共にまだ陣営をかまえていたヘブル人たちも、山地に隠れていたすべてのイスラエル人達をも彼の下に一致団結させた。(Iサム14:21-22) そして戦によって得た戦利品でもって国を富ませ、民の深い信頼と尊敬を

④サムエル記第一の9章の1節から10章の16節までのことである。

⑤サムエル記第一の10章17節から27節までの意。以下( )は同様のことを意味する。

うけたのであった。

こゝで簡単にサウルの人物について述べておこう。彼はイスラエルの中でもその風貌は人並すぐれ、身長は民の誰よりも肩より上だけ高かったと記されている。(Iサム10:23) 彼の性格は厳格で私生活は乱れず、祈り厚き人であった。彼はひとりの妻を持ち、子供達との関係も良かった。しかし彼にはもう1人、別な女性との間に2人の子供を設けたらしいが、それは決して回教徒でいうハーレム(harem)の如きものではなかったそうである。しかしこのように優れた彼も、人間が誰れしものが陥り易い、大きな過ちを犯すことになってしまった。それは次に述べるように、恩人サムエル、及び神との関係によって起こった悲劇であった。

## (2) サムエルとソウルとの関係。

主なる神に見出され、その命によってサウルはサムエルから油そゝがれ、王とされたことは前述のとおりである。そのサムエルは依然どおりその地の予言者の第一人者として尊ばれていたが、彼は時折サウルの許を訪ねて親しんでいた。しかしサウルは戦闘中に神にそむくことを2度行なったことを聖書はしるしている。それで神の怒りに合い、恵みの座から退けられてしまった。サムエルの落胆は大きかったことは言うまでもない。

聖書にみられるサウルの第一の背反はアンモン(Ammonite)との戦の後のことであった。ペリシテ人(Philistines)もイスラエルと戦うために、海辺の砂のように多くの軍勢を率いて攻め登って来た。そしてベテ・アンベ(Beth-aven)の東にあるミクマス(Michmash)に陣を敷いた。イスラエルの人々はひどく圧迫され、危険の近づくのを感じた。それで彼らは奥まった所のほら穴の中、岩間、地下室、水ため等の中に身をひそめ、隠れてしまった。しかしSaulはなおギルガル(Gilgal)に留まっていたので民は震えながら彼に従って忍耐していた。(Iサム13:5-7)

サウルはサムエルがこのギルガルにくると約束した日から7日間、待ちに待っ

たが、彼は来なかったので、民は心細くなってこゝを離れて散って行こうとした。サウルは彼がまだ主なる神に助けを嘆願していなかったことを思い出し、民等を留めるため思い切って、部下に全焼のいけにえを持って来らせ、サムエルに代わって燔祭を捧げた。丁度その時、サムエルがやって来てその様を見て大に怒った。サウルは正直に経緯を話して、弁明したが聞き入れて貰えなかった。それどころかサムエルは、

「あなたは愚かなことをしたものだ。あなたの神、主が命じた命令を守らなかった。主は今、イスラエルにあなたの王国を永遠に確立されたであろうに。今は、あなたの王国は立たない。主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。あなたが、主の命ぜられたことを守らなかったからだ。」（Iサム13:13-14）

と、いう意味深長な予言を残して、ギルガルからベニヤミンのギブア(Gibeah)に去って行ってしまった。こゝでサウルと予言者サムエルの仲違いが始まり、サウルの王国は永遠のものでなくなり、王はあまり遠くないうちに、退位を余儀なくされるだろう、という暗い影がイスラエル国を被うことになった。

聖書にみられるサウルの第二の背反はアマレク (Amalek) との戦の時であった。サムエルはSaulに「主は私を遣わしてあなたに油をそゝぎ、その民イスラエルの王とされた。今、主の言われることを聞きなさい。」（Iサム15:1）と命じ、主の言葉を伝えた。つまりイスラエルの民がエジプトから登ってくる途中にアマレクが彼等を待ちかまえていて、戦を宣し、苦しめたから罰する、と言われるのであった。万軍の主は次のように仰せられた：

「今、行ってアマレクを打ち、そのすべてのものを聖絶せよ。容赦してはならない。男も女も、子どもも乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺せ。」（Iサム15:3）

そこでサウルはその民を呼び集め、アマレクの町へ行って、谷に待伏せをさせた。彼はその地にいたケニ人 (Kenites) たちを避難させた。それはかつてイスラエルがエジプト (Egypt) から上つて来る彼等を親切にしてくれたからであった。

Saulはサムエルに言われたとおりアマレクを襲撃し、その民を残らず剣で殺してしまいましたが、その王アガグ (Agag) を生けどりにした。そのみかサウルとその民は主の命にそむいて、良く肥えた牛や羊、最もよい家畜や子羊等良いものを殺すのを惜しみ、戦利品として持ち帰って来た。その時主なる神よりサムエルに声があって次のように言われた。

「わたしはサウルを王に任じたことを悔いる。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ。」 (Iサム15:11)

サムエルは苦悩し、一晩中神に向かって大声で祈った。次の朝早くサムエルがSaulに会いに行く途中、1人の男に出会った。そしてサウルが自分自身の榮譽のために記念碑をカルメル (Carmel) の地に立て、ギルガルに戻って来たと言われた。サムエルはこゝで又Saulに不快感を与えられることになってしまった。

サムエルがサウルのいる地についた時、サウルはていねいにそしらぬ顔で挨拶をし、主の命を行なったと報告した。しかしサムエルの耳には羊の声や牛のなき声が聞こえて来たのでそのことにつきたずねた。するとサウルは兵達がアマレク (Amalekites) の所から主のいけにえにするため、一番よく肥えた良い羊や牛などを殺すのは勿体ないからと言って、連れて来たのです、と説明した。サムエルは彼の言葉を遮って叱った。サウルは昔とちがって、今やイスラエルの諸部族の頭であるばかりでなく、主なる神によって油注がれ、Israelの王とされている。その彼が主なる神により、イスラエルに敵対したアマレク人を一人残らず絶滅せよとの命をうけたにもかかわらず、それにそむき、アマレ

クの王アガグを連れて来た。その上、敵地から家畜を分捕って主の目の前に悪を行った。それにもかゝらず、彼は種々弁明につとめた。(Iサム15:20)

彼のなした業は一見、小さな背反のようにみえるかも知れないが、神の命より自分の考えを優先させたことが重大問題として問われるようになるのであった。サムエルはサウルが犯した大罪の本質が何であるかを、まだ十分にわきまえていないのを知ると、具体的にそれを厳しく説いて聞かせる。それを聖書の中より引用して以下に記しておきたい。

「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。まことに、そむくことは古い罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた。」(Iサムエル15:22-23)

こゝに至って、さすがのサウルもいさぎよく、己の犯した罪の深さを認め、サムエルに許しを次の如く乞う。“…I have sinned: for I have transgressed the commandment of the Lord, and thy words: because I feared the people, and obeyed their voice. Now therefore, I pray thee, pardon my sin, and turn again with me, that I may worship the Lord.”(Iサム15:24-25) 彼はサムエルに彼と共にイスラエルに戻り、主に礼拝をさせてほしいと願った。しかしもうその時はすでに遅く、主は彼からイスラエル王国を引き裂いて、彼よりはるかにすぐれた人物にそれを与えられることにされると聞かされた。“And Samuel said unto him, The Lord hath rent the kingdom of Israel from thee this day, and hath given it to a neighbour of thine, that is better than thou.”(Iサム15:28)

サムエルは度重なるサウルの熱心な罪の告白を遂に聞き入れ、彼について故

郷に帰って来た。かくしてサウルは主を礼拝した。しかしサムエルは彼が生け捕りにして来ていたアマレクのAgagを引き出させGilgalにて主の前でずたずたに切って殺してしまった。それから後サムエルはラマ (Ramah) に行き、サウルはギブア (Gibeah) にある自分の家<sup>のぼ</sup>に上って行った。サムエルはその後、2度と彼の所に訪れることをしなかったが、死ぬまで彼のために嘆いた。そして、主もサウルをイスラエルの王としたことを悔やまれたと聖書は述べている。

34 "Then Samuel went to Ramah; and Saul went up to his house to Gibeath of Saul. 35 "And Samuel came no more to see Saul until the day of his death: nevertheless Samuel mourned for Saul: and the Lord repented that he had made Saul king over Israel. " (Iサム15:34-35)

かくしてサウルは彼が最も頼りにしていた予言者からも、主なる神からも罪許されることなく、見放されてしまったのである。そればかりでなく、神の意志を優先させ得なかった彼は、後にその罪故に、彼の王国に絶望的な最後を遂げさせてしまった。そして彼自らは自害し、その屍はベテ・シャンの城壁にはりつけられ、さらしものにされたと伝えられている。(Iサム31:10) このサウルの晩年についての伝承は、Browningの*Saul* にとっては余談になる恐れのあることは承知の上で、何かの参考になればと思って触れてみた次第である。

### (3) SaulとDavid (ダビデ) との奇しき出会い。

主はサウルを王位から退けた後、その代りに、ベツレヘム人 (Beth-lehemite) エツサイ (Jesse) の8人の息子の末の子Davidを未来のイスラエルの王と心に定めた。そしてサムエルに命じて彼に油をそゝいで来るように命じた。サムエルが訪れてみたダビデは目の美しい、血色のよい、立派な姿の美少年であった。サムエルは主の仰せに従い、直ちに「油の角を取り、兄弟たちの真中で彼に油をそゝいだ。主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。」(Iサム

16:13) かくして不思議な神意によりDavidはSaulに代って後にイスラエルの王となるのであった。大役を無事に終えたサムエルは再びラマへ帰って行った。

一方サウルからは主の霊が離れ、主からの悪霊が彼を日夜おびやかすことになった。彼は悪鬼に憑かれたものの如く懊惱し、幾日も食物を口にすることもなくなった。それを憂いた家来どもは悪霊がサウルに臨む時、立琴の名手に琴を引かせて聞かせれば彼は冷静になり、元気を回復されるであろうと熱心にすゝめた。サウルはベツレヘム人、エツサイの許で羊飼いに従事している息子のダビデこそが、その名手であると聞き、人を遣わしてその若者を呼びよせ、側近く侍べらせた。(Iサム16章)

次の記録もこゝではいささか余談になることであるが、サウルが初めてダビデと出会い、彼を召しかゝえるようになった経緯がサムエル前書17章に詳細に述べられているのでちょっとつけ加えて置きたい。それはペリシテ人との戦いにおいて敵の代表戦士ゴリテヤ (Goliath) を美少年ダビデが石のつぶてをもって倒してしまいサウルを驚愕させたことである。その後、あつくSaulに重んぜられたダビデは彼の遣わす所のどこにでも行き、勝利を収めたので戦士長にされた、という話は広く人々に膾炙される所である。(Iサム17章-18章)

その後サウルとダビデの間には色々な運命的と思われる史実が多くあるが Browning作の*Saul*には直接関係がないので触れないでおく。

### Browningの*Saul*の概要について

(第一節) Saulは悪霊に憑かれて屢々苦しんでいたが今回はいつもより苦しみが堪えがたく、3日間も続いているようであった。彼の家来や部下達はサウル王の生命の安否をすら憂慮する程であった。それ故王自身の希望もあってか、彼の苦悩を癒すため立琴の名手Davidを招くことにしていた。この詩は待ちに待たれたその青年ダビデを出迎えるアブネル (Abner) の挨拶をもって始まる。アブネルは王の従兄弟でその軍の最高司令を任じられていた忠誠無比の人であった。彼はやさしく、丁重にダビデを迎え、王の様子を簡単に説明する。サウル

王は3日の間、天幕の中に閉じこもったまゝ物音1つさせない。王が中でまだ生きているという確証が得られるまで、部下達は断食を続けるというのであった。

(第二節) ダビデが沙漠の強い光線が、立琴の線を傷つけないように、と草花の蔓を巻きつけて持って来ているのを見て、アブネルは大いに喜んだ。

(第三節) ダビデはひざまずいて祈りをなし、サウルの天幕に走り寄った。入口の所に通行止めとして、地面に突き刺さしてあった槍を抜き、暗がりの中を這って王の天幕の中央の所まで行った。そこで又祈り、恐れることなく、ダビデがきたことを報告した。しかしサウルより応答は全くなかった。暗がりに目が馴れて来るにつれ、天幕を支えている大きな柱に、人影が1つ倚りかゝっているのが見えた。突然閃光が幕の上よりさし込み、それがサウルであることを示した。

(第四節) サウル王は真直ぐに、不動の姿勢で盲の如く、無言のまゝ、横木に両腕を差し延べて立っていた。まるで冬の松の木の枝に、独り懸る蛇の苦悶の姿をダビデに思わせた。

(第五節) ダビデは琴の糸を被っていた草花の蔓をとり除き、琴を出してそれをひき始めた。初めに彼は野辺の羊を、小屋に呼び込む時の調べを奏でた。彼の楽の音は、彼の故郷の緑の牧場や、清き小川の流れや、青空に輝く星の群を思い起こさせた。

(第六節) 次に彼はいかに多く鳥や獣と親しみ、その鳴き声や鳴き方を熟知していて、彼らを引きつけ、魅了し、興奮させることの出来る調べを、たくみに奏でたことか。彼はそれをサウルにかなでて聞かせながら、創造主なる神の創造の偉大さ、素晴らしさ、におもいをいたす。彼は又、主は偉大なるその愛によって、すべての生きとし生けるものを、人と同じ1つの家族、たらしめていることをさとる。

(第七節) しかしこれらの調べもサウルの心を動かさないことを知ると、ダビデは人間社会に関わる種々様々なことがらを、主題とした調べを、かき鳴ら

してみた。刈り入れの唄、結婚の祝賀の歌、労働の賛歌、葬儀の荘重な調べ等々。ところが“the Levites”によってうたわれた礼拝の合唱曲が奏でられた時、やっと初めて、サウルは意識を回復させたかのように見えた。

(第八節) ダビデは琴を打ち鳴らすのを止め、息をこらして、じっと耳を澄ませた。サウルはおのゝき、頭を動かした。しかし王の体は動かなかったのだ、ダビデは再び琴をかき鳴らし、歌をうたい始めた。

(第九節) ダビデは今度はサウルの勇猛心を奮い立てようと考え、男子一代の家庭や社会に於ける、活動的な、精力的な、そして勇気ある職業や行動の素晴らしさを琴の音に合わせて歌って聞かせたのである。

(第十と十一節) このようにしてサウル王の自意識を目覚めさせようとした後、ダビデは心をつくし、意を用いて、声高くサウルの勇名が、世に赫々と知れわたるを、のべて励ました。そうしているうちにダビデ自身のうちにも、熱情が迸るをおぼえた程だった。すると永遠に消えることがないように見えた高山の頂きの雪が、照りつける春の日差しを受けて、終に解け落ち、そこに新たな生命の芽生えをみる如く、サウルの病も去るのではないかと思われた。今まで天幕の柱に両腕を上げて垂直に下がっていた彼の体は大きく長く震えた。そして彼は胸の前に腕を組み合せ、今までの苦悩から開放され、周囲のものが認識出来るようだった。しかし彼はまだ人生に対して無関心そのものゝようだった。かつて敵をにらみ殺した程の眼光は、まだどんよりとして、秋の落日をみる如き感じではなかった。

ダビデは彼のうたと琴の調べで、サウル王の心がやっと醒めかけたのを知ったが、それをいかにすれば永続させるか、の問題に直面してしまった。

(第十二節) ダビデは歌というものは、世の中のすべてのことどもを材料として、生命の美酒を作り出すものと信じていた。それ故にこの美酒こそは、王の魂にそゝぐにふさわしきものだと思う。かつて自分がまだ無名の羊飼いであった時、大自然を通して学んだ人生のまことの価値、生甲斐、希望とあこがれ、等を詩歌の中で歌うことの重大さを、ますます強く感じ、自信を持ち直し、琴

をかき鳴らしつづけたのである。

(第十三節) サウル王は生まれながらの美丈夫で、強健な肉体と精神に恵まれていた。彼は敵を亡ぼし、国を治め、名声を博した。彼は神の恩寵をうけて、肉体的生活に於いては、棕櫚の若芽が延び拡がり、大木になる如く、大いなる成長と発展を遂げた。併し棕櫚の実が熟し、人々の養いとなる如く、彼も精神的発達と発展を遂げるべきであった。しかるに王は多くの功を成し遂げていたにもかかわらず、自らの過失のため、自ら犯した罪のため、功績は無に帰してしまったのである。こゝに人知れぬ王の歎きと、悔悟と、懊惱がつのって来ていたのであったらうと頷ける。しかし、棕櫚の木が、例え枯れて死んでしまっても、その実をつぶして酒を作れば、人々の薬用になる。そのように、もし人がその犯した罪を悔い改め、常に己を省みるならば、その人の人格はかえって磨かれ、以前より神に近ずき得ることになるものだ、と言うBrowningの考え方がほの見えている。もしサウルが魂の問題に重きをおいて考えてくれるならば、老いてからこそ、少年時代よりも喜びを見出せるものを、とダビデは思う。サウルには今、花花しいことは出来なくても、昔日の彼の功を人々は覚え、彼に期待を持ち続けるであらう。又彼が死去した時には、彼の偉勲を讃え、人々は彼のために記念碑を立て、彼の偉業を書に書き残し、世々後までそれを読み継ぐであらうとダビデはサウルを励ます。

(第十四節) ダビデは王の魂を勢いづけ、救いたいとの切なる願によって、このように歌ったが、これ皆、神の助力無しではいかんとも成し得ない所であった。ダビデの願いはたやすく実現出来なかった。

(第十五と十六節) しかしダビデが歌っていた時、サウルは魂はわずかではあるが反応を見せ始めた。彼のかつての王者らしい風貌や仕草や態度が、よみがえって来たような感じさせた。その時ダビデは、人は彼自身の中に神の形を見失うことがあっても、決して人たるの尊厳を失うことはないと確信した。

ダビデのうたに耳を傾けていた王は突然、くずれるように彼の厚い衣服の山の中に沈み込むようにすわり込んでしまった。夢中になって琴を奏でていたダ

ビデが気がついてみると、彼はサウル王の巨大な膝の間に抱かれていた。王は彼の巨大な指で少年ダビデの髪を撫でながら、その顔をもたげて、まじまじとその美しい瞳をみつめていた。ダビデは慈父の如くやさしい哀れな、老いた王に対して、どんな犠牲を拂っても渾身の愛をそゝぎ、王の病を癒さざるを得ない、と更に決意をせざるを得なかった。すると卒然として、彼は今何をなすべきかがわかった。もはや、もう琴も歌も用はなくなった。今こそ心より迸り出る言葉をそのまゝ王の前に披瀝して、語ればよいのだとダビデは悟った。

(第十七節) この節はダビデが直接にサウル王に語りかけ話したことを、思い出してダビデがのべている所である。ダビデは神の創造せる天地万物について歌い、あれこれと意見をのべて来たが、我々人間の知恵も、知識も、予見も、神のそれらに比ぶべきもない程、弱く貧しいものであることがよくわかった。我らに与えられている知識と判断力で神の力にさぐりを入れてみると、それは無限で無数で、無量で果てしがなく、完全無欠であることが認識された。それにくらぶれば、我々の力は無限小で、極微量で不完全で瑕だらけのものでしかない。それ故我々は神に従い絶対服従をするより外はない。そうすることによって日々心新たにされて成長して行くものである。しかし愚かな人間は自負心を持つが故に、全知全能の神と競争しようとする心が頭を持ち上げたりすることがある。それはあたかもこの悩める王に対する自分の場合のように、彼を癒す愛の能力が神のそれと比ぶべきもない程、格差のあることを悟り得なかったことと同然である。ダビデは熱烈なる愛情を込めて王の回復をねがって手をつくしたのに、まだ成功していない。そこで彼は一步神の前より下がり、完全なる神の愛にすがって、不完全な自分の愛を憐み、助力給わらんことを乞願った。宇宙の大法をしろしめす愛なる神は、必ずやいやしの御手を借し給うに違いない、と熱涙をしばって折った。

(第十八節) 王を思うダビデの熱誠あふれる祈りの言葉は前節からつゞく。前節にある如く彼はすべてを投げうって、平身低頭、平伏し、心から“主が私に賦興された批判者としての資格を御前に返上します。” (“Now I lay down

the judgeship he lent me.”) (XVII. 243) と無上の謙虚さで、誠意をもって歎願した。

ダビデは王を救うためには例え命の泉を涸らしても、全力を傾けなければならない、という懸命な悲痛な意志を持ち続けていた。それを、いと高きみくらにいます主はよみし給いて、彼に靈感を授けられた。ダビデが王に対する愛が、かくまで強く深いものであるならば、全能なる神から来る愛は、いかばかり強く深いものであろうか。その神の愛をもってすれば、いかなる悪霊も王から追い拂われ、王は救われるであろう。神の愛が全知全能のものなれば、萬民に対する愛は広大無限な筈である。その愛により頼み、主を真心より愛する者は、主に更に深く愛される。激しく、深く愛する者は、最も激しく深く苦しまねばならない。

Browningはダビデに、愛の理想的な表現は十字架によって最もよく示されると言わしめている。人類を罪から解放し、その罪の贖い主となるために、神はその完全無欠な独り子を十字架の上で死なせ、人類に与え給うた。この事実がダビデの心にひらめいた。ダビデの献身的奉仕も、願いも、努力も、サウルを罪の悩みから解放し、救うことは出来なかった。もはや今こそ、主の大いなる愛が、サウル王に注がれる以外には救済の道はない、とダビデは心眼が開かれ、予言者の如き心境になった。そしてキリストの来るを予言する。

“…O Saul, it shall be

”A Face like my face that receives thee;

a Man like to me,

”Thou shalt love and be loved by, for ever:

a Hand like this hand

”Shall throw open the gates of new life to thee!

See the Christ stand!”

(xviii, ll. 309—312)

「その人来りて汝がため新らしい門を開く！見よ、救主基督ぞ立つ！」と。(L

(第十九節) この節ではダビデ自身の心境の描写が中心になっていて、サウルの姿はもうあらわれぬ。ダビデは予言者の如き心境になって、大いなる幻をみるが如き心地で、もと暮らしていた羊の牧場に戻り、羊を飼っていた。しかし彼はいかにして家にたどり着いたか、全く記憶がない。それでも彼がかの大予言をなした時、天地が大いに揺らぎ、天使は列をなして群がり、集い、天も地も、地獄も、全てのもの皆は、これから起こるであろう偉大な奇跡の現われるのを待ちかまえているようだった。

世の中の盛んなどよめきが終って、夜明けと共に静寂が訪れた時、森羅万象は畏敬の念にみたされ、新しく全世界を覆うであろう愛の法則の支配(“Love is the law of life”)を待つかの如くに見えた。これで壮大な構想を持った Browning の *Saul* は終った。

### Epilogue

主に油そゝがれた者としての存在は、主の目から見て、最高に信頼できる僕であった筈である。そのサウル王が主の命に従うより自分の意志に従って行動したのであるから、これ程の大罪はないであろう。それ故に主は彼を退けたことはこの詩行の中に明らかにされている。賢明なサウルは己が罪の深さを知り、懊惱し、悪霊につかれたかの如くなってしまったのだった。ダビデは王の苦しみの原因を知るよしもなかったのかもしれないが、たゞひたすらに、全精力を傾けて王を癒そうとしたが無駄であった。主による、より外に道はなかった。

聖書によれば、厳密な意味では、何人たりとも、罪を完全に拭い去り、神の前に完全に潔白である、とすることは出来ないのである。ダビデが王を治癒することがかなわなかったことは当然と言はざるを得まい。ところが主なる神は広大無比なる愛を持つ主である故に、又全能である故に、唯一人、この難事を解決出来るのであった。主はこの世にて、彼により頼む万人の罪を贖うために、主イエスキリストを下し給うた。十字架の前に立たれるその主こそ、サムルを

初め万人の罪を許し、安らぎと、救をあたえることが出来るのである。このような大いなる思想を高らかに歌いあげたBrowningに絶大な賛辞を表したいと思う。

最後にこの稿を閉じるにあたり、次の聖書の中にある詩篇にこめられているダビデの想を述べておきたいと思う。(詩篇32:1-2)

「幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。

幸いなことよ。主が、<sup>トガ</sup>咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。」

— 終り —

参考文献 (脚注にある以外のもの)

- ① 「聖書」(新改訳) 翻訳 新改訳聖書刊行会  
発行 日本聖書刊行会 発売いのちのことば社 昭和45年10月1日再刷
- ② *The Holy Bible: Authorized King James Version* (Oxford University Press, Great Britain)
- ③ 「聖書大事典」教文館 1989年発行
- ④ 「新聖書大辞典」キリスト教新聞社 昭和46年3月(1971)発行